

トルコギキョウのロゼット性の検定期

今村 仁・須藤憲一 (野菜・茶業試験場久留米支場)

Hitoshi IMAMURA and Kenichi SUTO : Effect of the time on the test in rosette formation of *Eustoma grandiflorum*

前報¹⁾では、ロゼット性の検定法の再現性が夏の自然条件で高いことを明らかにした。本報は夏以外にも検定を行うために、播種期や温度条件を変えた場合の検定結果の安定性と品種反応を調査した。

1. 材料および方法

1) 共通するロゼット性の検定法:直径約13cmの底面給水用の白色プラスチック鉢を用い、鉢底に大粒パーライトを敷き、その上にメトロミックス350を入れて播種した。供試した品種・系統は第1図に示した。常時腰水給水で栽培し、1鉢当たり約35個体を目標に3回以上に分けて間引きを行った。新たに茎伸長を開始する個体がほとんどなくなった時点(播種後3か月半から5か月)で茎の伸長状況を調査した。7月播種と9月播種では、播種から第1節本葉展開終了時まで遮光率約60%のミスト室に置いた。各品種・系統とも2鉢を供試した。

2) 7月播種(自然温度):1996年7月12日に播種した。供試した交配系統No. 9503とNo. 9601は‘ホーリーホワイトNo. 3’の後代における集団採種、No. 9603は同市販品種内の個体間交配、No. 9608は‘ホーリーホワイトNo. 3’後代×‘若紫’によるものである。No. 9601とNo. 9608の両親には本検定方法でロゼット性が弱いと判断された個体を用いた。8月20日以降は無加温のガラス室に移して栽培した。

3) 9月播種(自然温度):1996年9月13日(一部の品種は9月18日)に播種した。無加温のガラス室で栽培した後、12月18日からは最低気温15℃のビニルハウスで栽培した。

4) 12月播種(高温条件):1996年12月20日に、昼温/夜温が38/26℃±1.5℃、12時間日長の人工気象室で播種した。2月19日に人工気象室から最低気温15℃のビニルハウスに移して栽培した。

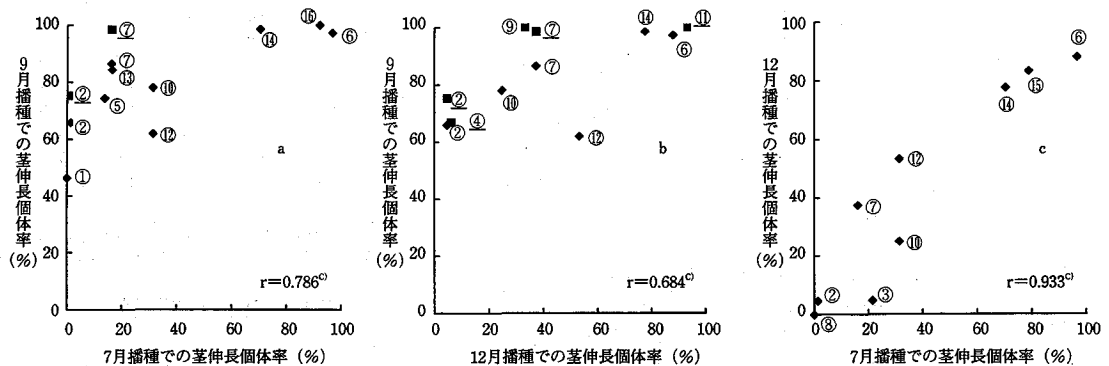
2. 結果および考察

1) ロゼット性の検定期の影響:ロゼット性の検定結果を第1図にまとめた。9月播種での自然温度条件下では全体的にロゼット化する個体は少なく、7月播種での自然の高温、あるいは冬季の人工的な高温処理によるロゼット性との相関は低かった(第1-a, b図)。12月に播種して高温条件で栽培した場合のロゼット性は、7月に播種し自然の高温を受けた場合の検定結果とほぼ同様となった(第1-c図)。したがって、高温環境に播種し、引き続き低温に遭遇させずに栽培すれば、夏以外にもロゼット性の検定が可能であると考えられた。

2) ロゼット性の品種・系統間差の影響:交配系統では、両親にロゼット性の弱い個体を用いるとそのF₁のロゼット性も弱くなること、市販品種の個体間の交配によってもロゼット化しにくいものが得られる場合があることが認められた。この結果から、ロゼット性の弱い個体を選抜して交配親に用いれば、1世代でも顕著にロゼット性を弱くすることが可能であると判断された。また、市販品種の中にロゼット性の極く弱いものがあることが判明した。

引用文献

1) 今村 仁・須藤憲一:園学雑 66(別1):452-453, 1997.



第1図 異なる播種期における茎伸長個体率^{a)}の関係

注) a) 7月播種では茎長が16mm以上、9月、12月播種では30mm以上に伸長した個体の率。供試品種・系統:①あすかの波、②あずまの波、③あずまの粧、④キャンディマリ、⑤グローリーピンク、⑥サミットピンク、⑦ネイルマリネオ、⑧フレッシュホワイト、⑨プライダルバイオレット、⑩ホーリーホワイトNo. 3、⑪ロイヤルバイオレット、⑫若紫、(以下、交配系統)⑬No. 9503、⑭No. 9601、⑮No. 9603、⑯No. 9608
b) 番号に下線を付したものの9月の播種日は18日、下線のないものは13日播種
c) 直線回帰計算による相関係数(9月18日播種は除外)